

「学び続ける教師」の姿を追う ～教師の挑戦の根底にあるもの～

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 真由美, 渡邊, 淳子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029220

「学び続ける教師」の姿を追う

～教師の挑戦の根底にあるもの～

小林 真由美 渡邊 淳子

1. 「学び続ける教師」との出会い

(小林 真由美)

渡邊淳子先生との出会いは、もう 30 年以上前、高校の入学式、なぜかその教室の風景も彼女の姿も鮮明に記憶の中に蘇る。殿下中学校という本当に小さな学校から、たった一人で高校に足を踏み入れた彼女は、中学校だけでなくその地域すべてを背負って代表者として乗り込んできたという感じがした。私のように大規模校から大勢でやってきて、1 年生のクラスにさえ、すでに顔見知りの友達が 10 人はいて、その知り合いという傘の中で小さくまとまっている者とは何かが違う。入学式のその日、とにかく 40 人ほどの学級の中で、誰の心にも、最も印象的な人物として残った彼女であった。型破りで、ある意味、破天荒な彼女の性格は教師となった今も変わらない。今日まで多くの教員と関わり合ってきて教員は自らの個性を大事にしないではいけなく感じる。どんな教育理論も、どんな指導技術も、実はその人の人間性の上に成り立っている。教員は実に人間味あふれる仕事なのである。なぜなら、子どもというものは理屈抜きで、人と人との関わりを直感的に感じて行動する。教員の中にもいろんな人がいる。教員でありながらちょっと人前で話すのが苦手な人、几帳面で 1 ミリのずれも気にかかる人、逆に大胆でちょっと横柄だとも思える人……。どんな人が教員に向いている、とはいえない。ただ、どの人も自分の個性を知り、その個性を教員としての強みとして生かしていかなければならない。そう

いう意味で彼女は自分自身をよく知り、その魅力をそのまま表出させて、子どもの中にぐいぐい入っていく。そして子どもたちは間違いなく、みな渡邊先生が大好きである。

その型破りな気質を大事にしながら、五十歳を過ぎた今も彼女が続けていること、それが「挑戦」である。平成 24 年 8 月 28 日の中教審答申で「学び続ける教員像」が明らかにされた。教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力、高度な専門的知識、総合的な人間力といった求められている力を追い続け、彼女はいつの時も学び続けることを止めない。授業名人としての認定を受け一流の教員でありながら、彼女はさらなる挑戦を続ける。「これでいい」は決してない。何が彼女を駆り立てるのか、そしてそういう彼女の挑戦を受け取った子どもたちはどう育っていくのか。

昨年度、主に高学年を育ててきた彼女が附属小学校に異動し、何十年ぶりで 1 年生を担当した。教員生活経験の中で、これまでにたった 1 回しかない 1 年生を相手に、彼女は飽くなき挑戦を続けている。彼女の挑戦の姿を追いながら「学び続ける教員の姿」を捉え、そしてその挑戦が子どもたちの可能性をどう広げていくのかを追いながら「挑戦」の意味を考え、それとともに挑む彼女の熱意の根幹を探っていきたいと思う。

2. N 小学校 6 年生にみたもの

(1)初めての参観授業から

彼女の授業をまるまる1時間参観したのは6年生図工「あり絵ないworld」が最初であった。「見に来てみるか？」の誘いに何の気なしに出かけたのだが、そこには彼女の型にはまらない自由な発想と入念に仕掛けられた挑戦があった。今、考えてみるとその彼女の意図した深いところまで、突然訪れて感じ得るはずもないが、しかしその中にある深い思いは子どもたちだけでなく参観した私にも衝撃として伝わった。そもそもこの授業の「あり絵ない world」のタイトルが挑戦である。授業開始前から感じる子どもたちのわくわく感はこちらの小さな仕掛けからも生まれている。当時の私はこの授業の成功の秘訣について下記四つを挙げている。

- 子どもに備わるわくわく感
- 子どもと先生の大きな信頼関係
- グループで協力する必要性
- 題材に潜む困難さと挑戦から生まれるアイデアの広がり

以下は授業記録の一部である。

（前略）グループの話し合いに入る前に、もう子どもたちはやりたくてうずうずしている。先生は、話術を巧みに使って例をたくさん見せた。特に友だちが作ったものを例とした時が、効果的でわくわく感が高まる。さらにすばらしかったのは視点を示してイメージ化したこと。ワークシートも効果的で、この時点で一人残らず自分がやってみたい一枚をすでにイメージとして描いている。そして、その視点を通して、ちゃんと先生が教科の学びとして子どもたちに学んでほしいことを伝えたので、自然とその枠の中で考えを深めていく。子どもたちは考えてイメージすることが楽しくなりすでにわくわくしている。だからそれを実際、撮って確かめてみたくてたまらなっている。カメラを与えたときに、誰一人として「とにかく適当に撮ってみよう」的ないわゆる「むちゃくちゃ撮り」をしなかったことはこうした仕掛けのおかげと思われる。

～グループで互いの考えを出し合う場面～
A「なんかあるか」

B「じゃ俺言うよ。糸をこう前にあって、うしろに歩いてるような人を撮って、で綱渡りしてるみたいな・・・」A「ああ、いいな」

C「私は、指の先にこう人載せて、指先にのっかってる感じ」

E「私はうで！うでの上に人歩くみたいな」

A「ああ、なんか二人の合体版みたいな感じか」

D「こないだのK君みたいな肩に人のせて、またその人の肩に人のせて・・・連続して」

E「でもそれって相当大きさ考えないと・・・」

F「私の案はさ、床の上寝て逆立ちしてるみたいに見せるんやけどそれも、反対からもう一人足の上、足のせて、逆立ちの連続みたいに・・・」A「ああそれいい」B「それにしよか」

A「でも、Bのもいいな。綱わたりってのが」はじめはそれぞれやりたい自分の思いでいっぱい折り合いがつくのかなと思うが、上手に意見が収束していく。（中略）

やってみると、新たにこの課題のすばらしいところに2点気づいた。

一つは題材に潜む難しさ。イメージはしたものの撮ってみた写真は「え？あれ」という感じ！ですっきりしない。うまくいかないことが学びのチャンスである。

そしてもう一つはデジカメという機器のすばらしさでその失敗が記録として残されていくこと。

さて綱渡りの写真に挑戦！最初は階段でしかし、できあがった写真に絶句してしまう。

「ひもがまず短すぎ。手が写ってまうなんかないかな」探しに行く「コードにしよう」「でも、糸みたいに人間が乗れそうにないのがいいんやけどな」「（ねじって）ほら、ほんとの綱みたいや」

とってみる（ずれている）

「高さがあわん。もうちょっと階段上がって」

「暗いなあ。ストロボにする」（中略）

産みの苦しみがあって、思考は深まっていく。

できた！という達成感もいいけれど、なかなか納得いく状態にならずにいりいりするのも学びである。採光の問題、写したくないものがうつ

ってしまう歯がゆさ、イメージのような躍動感がでないこと、こういう課題が子供たちの思考をどんどん広げていく。(中略)

最後の共有の時間は、またいっそう意味ある時間であった。この班のAくんは手を挙げて「昨日は簡単だったのに、今日は難しかったです。ちょうどいい場所がなかなか見つからなかったです」とその困難を言葉にする。子供たちからは「遠近法だけではだめ。持ち方とかも工夫しないと」と体験してみても初めて学んだ言葉がたくさん出てくる。

先生から「グループでこれぞ一枚を選んで」と言われ、今までの撮った写真を見ながら「ああ、ほらだんだんよくなってるわ」「これはじめは、全然、綱渡りじゃないね」「これ暗いわ、確かに」全員がもう一度学びを振り返る。活動していたときはモデルの子や指示する子がいて全員で写真を見ていなかったのである。改めて振り返りながら最後の一枚にたどり着いた過程を学びの振り返りとする。さらには「他のグループを見回って」との指示で他の班のを見ながら、「うへんでもちょっと他の班のの意味がわかりにくいなあ」「自分でやってると、きつとわかってるって思ってるんや」「小物使うのいいなあ」と自然に鑑賞できていたのもすばらしい。(後略)

当時の私は「あり絵ない world」というあり得ないタイトルで、45分の枠に縛られず、しかも教室の外どこに撮りにいってもいいという束縛や規制のない型破りなスタイルに驚き、その根底にある先生と子どもの信頼の厚さを感じ取った。そしてそこから繋がる確かな学びに衝撃を受けた。まだまだ彼女が仕掛ける「挑戦」の深いところはわからなかったが、これまでに見たことのない子どもたちの学びの姿に感動し、その引き金となるものは何なのかを追ってみたいと強く感じたのであった。

(2)歴史学習における挑戦

二度目の参観授業となったのは社会科「長篠の戦い」である。以下、授業記録の一部を掲載する。

普通の1時間の授業にあんなに準備する先生がいるだろうか。まるで1時間、歴史博物館に行ったような活動が仕組まれている。カードでの提示、黒板上の年表の活用、鉄砲の登場、お手紙、クイズの提示板。子どもたちは鉄砲が出てきたとき、急に種子島の黒船を見た日本人と同じ表情で、「うわあ」と歓声を上げ、教室が驚きで震えた感覚があった。信長からの子供たち一人一人宛の手紙もすばらしい。また、それを先生がもったいぶらずに、さりげなく当たり前に届いたかのように演出し、さらには後のビデオにつなげて天下布武の印までちゃんと押してあるのには本当に感服する。(中略) 自然と子供たちの思考の回転も速い「これって誰との戦い?」「織田と徳川じゃ?」「馬乗ってる人か?」「ちがう、こっち」「上杉何とかじゃないんか。」「それ一回戦ったやろ」「徳川じゃないんか」「ああ、もう時間来てしまう」と言って教科書を、めくって探そうとする。「それは、だめやって。教科書見てもたらおもしろくないやん。答えは絵から探すの」と言って改めて屏風の図から手がかりを探す「あ、ここにあるよ。秀吉、秀吉って名字なに?」「ああわかった。豊臣!」で二人ともその瞬間挙手する。ここまでのやりとりがかなり速い。友だちの発表から徳川家康も参戦していたことがわかり、「ほら、やっぱりあたしは徳川やと思ったんやって彼女たちはペアの話し合いの際、絶え間なく話している。まるで黒板の上に貼ってある年表の上を駆け抜けていくかのように・・・」(中略)

一人一人個性のあるノートで、どう整理すべきかをよく考えてあり、どの子のノートもととてもきれい。あの素早いテンポの中で、聴き話し考えそしてノートをとることで子どもたちは思考をフル回転している。前回の図工のように、じっくり話合って思考を練るのも学びなら、こうしてテンポ良く与えられたことを次々にこなしていくのも学びである。社会科の内容だけでなく、こうした力も養われているのだと感心する。(中略)

最後のクイズは驚きの連続。「戦いの日は雨か、晴れか」「なぜこのとき数個しか持ってこなかった鉄砲が戦いでは3000丁もあったのか」「この鉄砲の技術は今、どう生きているのか」

「鉄砲使ったから晴れ」の正解だけでなく「ぬ

かるんでぐちゃぐちゃで馬が動けなくなったから雨！」先生は「前日は雨だった」とフォロー。Fさんの隣の子は「雨だったらそれが印象的だから屏風に書くはずだよ」となるほど・・・。鉄砲のことについては「きっと中国で大量生産したんや」「それなら韓国で？」今の工業生産事情をよく分かっている。「そりゃ今やろ」と先生もすかさずつつこむ。「やっぱこの時代はメイドインジャパンやろ」小学校6年生と思えない会話。しかも苦勞して作り上げたという職人気質は今、どう生きているのかと問われ、私の思考ははたと止まるが「花火や」とひらめく子どもたちの柔軟さ。Fさんはノートに「秘ストーリーのコーナー」を作って鉄砲が花火として生きていることを囲む。子どもたちが本当に学んだことが自分の手で自分に残るよう工夫されて記録されていく（後略）

歴史学習に取り組みやすいよう資料をふんだんに使い、前時の復習を交えながら確実な習得をさせている。手紙やビデオ、さらには実物の鉄砲まで用意しイメージ化を図る。クイズや裏話も興味深く、子どもたちのわくわく感は図工の時間とも決して劣らない。一時間のこの授業にどれだけ用意周到な準備をしたことだろうと感動し、子どもたちはしあわせだとつくづく感じた時間であった。しかし、この後、彼女の紀要を読んで、私自身の見取りの甘さに気づかされた。彼女の挑戦は、こういう用意周到な準備をただけの一時間の授業ではなかったのである。以下、渡邊先生の紀要から抜粋する。

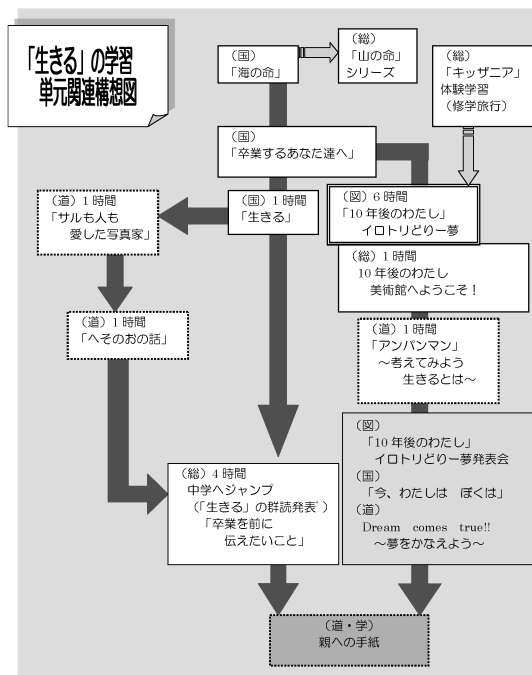
なぜ社会科を軸とした構想を立てるかという点、過去を学習することで歴史の流れの中で生きている自分を自覚できれば、自分自身の未来についても考えられると思うからである。わずか十年あまりしか生きていない子どもたちが未来を考えるときに、過去の人類の努力の積み上げに気づくことは大いなることであると考え。過去を知り流れを知りそれらから学んだことをこれからの自分の生き方に生かしていけるものがあるだろうと考える。悠久の歴史すべてを指導することも理解することもできない。しかしせめて覚えるのではなく問題解決の視点を持って学ばせたいと考える。今の自分や未来の自分に生かせる何かを見つ

けてほしいと思う。

彼女の挑戦は社会科を基盤として、【人間の生き方】【平和】【文化の伝承】【命】という壮大な軸を展開していこうというものであった。最後のクイズの「なぜ鉄砲は3000丁もあったのか」「この鉄砲の技術は今どこに生きているのか」という問いは豆知識などではない。これこそが【文化の伝承】【人間の生き方】という大きな軸に触れる重要な発問なのである。子どもたちもまたそれを真剣に考え、ほんの少し外国から持ってきた鉄砲から術を盗み、日本人の職人気質を生かして3000丁もの鉄砲を作り上げたのが長篠の戦いで、しかも今なおその技術を花火として生かしているという事実に至りまで考え及んでいる。ここに彼女の歴史学習を通して本当に子どもたちに学んでもらいたいことの真髓が潜んでいたのである。これを機として私は彼女の授業の中に潜む彼女の大きな願いを意識するようになった。彼女の挑戦は、6年生の卒業を目の前にし、より大きくダイナミックに仕掛けられることとなる。

(3)「いのちの学習」壮大なる最後の挑戦

国語、図画工作、道徳、総合この4つの教科と領域を絡め合わせた次ページの構想図を目にしたのは、図画工作の「10年後のわたし」道徳「アンパンマン」を参観した後であった。図画工作の授業の中に、歴史学習と重なる単なる教科のねらいだけでなく人間としての育ちをねらおうとしていることは私にもダイレクトに伝わった。ここまでの授業参観を通して、彼女の挑戦が簡単に1時間を見て取れるものではないことに気づき始めた私は、その挑戦の成果を子どもの姿として捉えようとした。道徳「アンパンマン」では子どもたちが「生きる」ことについて語り合う貴重な姿を見る。挑戦の成果はかくもすばらしく子どもたちの心の成長に繋がっていた。



DVD視聴。アンパンマン登場。みんなわくわくで見入る。曲が流れる。自然とみんなが歌い出す。何気なく「2番知ってる？」

アンパンマンの歌詞を配布。先生のすてきな朗読が始まる。思わず「おー」拍手。「感想をばばっと書いてみて」（中略）

感想には

「なにげなく歌ってきたけど」

「普通に歌ってきたけど」

「アンパンマンのことだと思っていたけど」

「小さい頃はこれで勇気づけられたんだけど」

とどの子の感想にも「けど」が表現してある。今、この歌詞を改めて考えてみた驚きがうかがえる。

「自分に置き換えると深いなあ。」

「生きる大切さみたいなものがわかる。」

「命を感じる」「生きる価値」・・・

と子どもたちの感想は「生きる」ことへ向けられ、明らかに4、5歳の時に無邪気に歌っていた自分と今の自分とを比較している。

「今日はね、「生きる」ということを考えてみよう。先生もね、年とってきたからなんか無意味に生きるのはもったいないかなあと最近、

思うんやわ」何人もの子が大きく頷く。（先生のこの授業への願いが伝わる。子どもたちもその意を受け取り、本気で「生きる」ことを考えてみようと思う様子）

（中略）

8枚の付箋を4人がそれぞれ説明する。（自分につけたい力を問われ）グループディスカッション。

T「自信を持つこと」K「へえ？自信ないの？」

「いつも発表とかして自信满满みたいなのに」

「意外やなあ」とみんなが口々に言う。A「僕は

やりたいことを書いてみた。簡単なことより難

しいことをやる！」「それいいわ」「それ大事

やがの」「楽な方へ流れてまう」「でも簡単な

ことばかりやっているとすずまんやって」「

ゴールは遠い」「そう、難しいことをやった方が

意外とゴールは近いんやって」K「難しいこと

を選ぶって大切なことやわ」としみじみ言う。

みんなが頷く。

「でもさあ、生きるって考えるよりまず生きてないとあかんね」「今の自分の命を守ることが大事なんじゃないか」「命の大切さを知ることが基礎や」「死んだらこんな授業してられんしなあ」この一言は付箋には書いていなかった。話し合いの中から生まれた考えである。みんなが納得して語り合う。「でもさ、命の重さを私はよくは知らない」「あー俺、一回頭ぶつけて死にそうになった」「一回失敗すると思ひ知るね」「失敗は成功の元、みたいな」「だから先生に怒られる方がいいってこと？」「それより私たちって生きることに感謝できていない」（だんだん言葉が繰り上がる）

～クロスセッション～

ホスト役Fはその役を重荷に感じながら責任を果たそうと、一生懸命語る。

「難しいことに挑戦するとゴールは意外と早いだからチャレンジ精神が大事」

「あ～苦あれば楽ありか」「確かにそうやの」

「えーとあとなんやったつけ」と焦る。「大丈夫やよ。聞いてるから」温かく励ます。

「命を大切にすることがそもそもの基礎。」

「操り人形でなくて自分でやること」

「失敗するのをおそれて進まないより失敗して

何かを得る方が大きい」

グループの中ではにこにここと黙って人の発言を聞いていただけのFは、ちゃんとポイントを押さえて大事なことを落とさずに語る。時々言葉に詰まると、聞いている子たちは「大丈夫！がんばって」と励ます。Fは「ごめんなさい。上手に話せなくて」と返す。終始、温かな雰囲気。Fはこの温かな励ましがとても嬉しかったことが後でわかる。聞き手の子どもたちから「そうだねえ『めんどくさい』って確かにそういってたら前にすすまなくなる」「『失敗して何かを得る方が大きい』ってそうやなあ。しみるなあ」と共感。どんどん赤で言葉が書き込まれる。元のグループが席に戻る。「わあ！めっちゃ書いてある。」F「みんな共感してくれたよ」「うんうん」とうなずきながら、他のグループの書いてくれたのを一生懸命読む。「命が大切」の部分に「中には一歳までしかいきられない人もいるから、まずは生きてることに感謝すべき」の朱書きに「わあ、いいこと書いてある」と感動。

先生から「グループの中でもう一度書いてある中から3つを選んで書いてみて」と指示。このグループはここまでの間に十分話し合いがされてきたので話の中心になった3つをすぐ選択。「生きていくこと」という付箋を指さして「やっぱ生きることが基礎や基礎。」とKが繰り返して「生きていなかったら意味がない」が基本だとみんなが納得。「簡単な道を選んでもゴールは遠い」「自分の人生は自分で作り続ける」の3つを書く。この3つはちゃんとFがポイントとして他のグループの子に紹介したものと一致！Fなりにちゃんとホスト役が果たせたことに満足。そして各グループの書いたことを見て回る。いつの間にやらバックミュージックで「栄光の架け橋」が流れる。子どもたちは真剣な表情で見て回る。自分たちがこんなに高尚な話し合いができたことに満足している様子。もちろん本当の生きる意味を知るにはまだまだ経験も足りず、人生も知らないのだけれど、こうして真剣に大きな課題に向けて仲間と語り合えた誇りを感じている。最後の感想を書く場面では誰も

ためらうことなく必死で書く。この授業の中身の濃さがよくわかる。鉛筆の音だけが漂うこの時間が素晴らしい時間。

「誰か発表してくれるか」という先生からの投げかけに、今まであんなに引っ込み思案だったFが手を上げる。

「できないからやめようってあきらめてばかりではどこにも進めないということに気づきました」と自分の書いた文章を読みながら「発表するときだって自分はできないなんて思わずに、みんなといつしよなら、みんなが聞いてくれるならできるっていうように」と書いてないことを付け加える。彼女は自分のホストという役を果たした経験を今の自分の心境そのままを照らし合わせて話したのだ。まさに今、彼女はどのように生きていくのかをこの時間の間に学んだ。長い長い感想の最後の文は「自分に少し自信がついたような気もしました」と締めくくっている。彼女にとってこのグループの話し合いを伝えるという大役が、この素晴らしい感想に繋がったのである。

さらに最後に先生から。ここまでほとんど子どもたち任せにしっかり考えさせてきた先生がこの授業への願いを語る・・・

「人間はね、普通は人生なんて意識しないで、今を生きてるだけなんやの。でもこの今、今、今、がつながっていつしか人生になっていく。人生って今を繋いでいくことなんやね」黒板に書かれた今、今、今、今の文字が子どもたちの胸の中に染み渡る。自然に小さな拍手をしている子が何人もいる。この授業を支えた先生の願い「卒業を目の前に子どもたちに今この思いを伝えたい」が深く深く染み渡る。（後略）

「生きるとはどういうことか」この難しいテーマを道徳で取り上げ、たった 12 年間の経験だけで彼らは熱く語り合った。「何をするにもまずは生きていなければ意味がない」とグループ内で語り合ったこの一言は、後の「命の授業」の伏線となる。「簡単な道を選んだらなお、ゴールは遠い」や「自分の人生は自分でつくる」はこのままこの後の「10年後のわたし」の主題であろう。そして、Fはまさにこの授業そのものの中で、自信のないホスト役を務めあげられた喜びから「できないからといってあきらめていたらどこにも進めない」

と学ぶのである。そして先生は「今」を繋いでいくことが人生をつくることだと言う。まさに「今」この授業で、生きる意味を学んだFは、ひとしおの思いでこの先生の言葉を聞いたであろう。なぜ彼らがこんなに深い話ができるのか。この1時間だけを参観した者は、単に良くできた学級だとか、日頃の言語活動の賜だとか、先生の引き出し方だとかうわべだけをとらえるだろう。

彼女の挑戦に添ってきた私はここに来てようやく、壮大な挑戦の意義を感じ取り、人間形成の土台と成る小学校時代の集大成としての6年生でしかできないことを仕掛けていたとわかった。彼女はこの子どもたちのこの先の将来を見ている。彼女の挑戦はまさに今、今、今を紡いで彼らの人生に刻み込もうとしているのである。そしてその挑戦は彼女の専門教科である図画工作を通して、教科の意味を捉え直しに入る。

机上には自分の夢を託して作った「10年後の私」の作品。展示作品に貼られていたたくさんの全校児童の付箋に対して・・・

「自分たちが作ったのが他の人に評価されて嬉しい」

「自分の思いが伝わったので嬉しい」

「どの学年にも何歳の子にも伝わった事が嬉しい」

「伝わってほんとに夢に向けてがんばろうって気になった」

「細かいところまで見てくれていて嬉しい」

「感想の中に細かく見ている表現があって嬉しい」

単に嬉しいだけでなく何が嬉しいのか、そんなことを教師がつっこむまでもなく子どもたちは次々語っていく。発言を見てみると、上手に繋がっているのがわかる。前の発言をしっかりと聴いてさらにそれを深めようとして語る。自分の夢を1つの作品に投入しそれが作品を通して他人に伝わっていき、そのコメントからさらに自分の夢への意欲につなげている。先生は子どもたちの発言を上手にピックアップして板書する。ここからは国語とコラボである。「聴く人の心に届くように話そう」と課題提示する。「話すポイントは何だろう？」と問いかければ「一番伝えたいことを強調する」「声の大きさを変え

る」「何度も繰り返す」「たとえなどを入れる」「詳しくわかりやすく例を挙げる」「じゃ聞き手は？」「さっき言ってたように相手にわかるようにうなづくとか反応する」ちゃんと先生の伏線は子どもたちに伝わっていて、付箋で全校児童がリターンしてくれたことを生かして照らし合わせて考えている。

「質問もするといい」「自分の意見も伝えるといい」「間の取り方も大事だと思います」

こんなに盛りだくさんのポイントはあつという間に子どもたちから次々出され5分も立たないうちに黒板がいっぱいになる。

グループで自分の作品についてスピーチ。(中略)「作品見ればわかると思うけど、僕は科学者になりたいです。」「はじめて僕が生活科の授業を受けたときすっごくたのしくて。こういうことがずっとやれたらなああって思ってた。」「きらきら輝いて話す。」「自分に足りないなああって思うことは本を読んだりとは割とするんだけど、外へ出て体験することが自分に足りない。実際は本に書いてないことのほうが大事だったりするから。体験しないとわからないことをしっかり勉強していきたい」

「僕はテレビに出る歌手です。初めはテレビに出て派手なかつこうするのが嬉しいと思ってたんだけど、この間お楽しみ会で歌ってみんなから手拍子とかもらって、そしたら、こうやってみんなの笑顔を見ていて、心を癒せるようなりたいなああって。」

「あと、この作品のお客さんを見てほしいんだけど、これいろんな人がいて外国人とか宇宙人まで・・・宇宙人なんてふざけてるって思うやろうけどそうじゃなくて、ほんとに宇宙の果てまで僕の歌を聴きにに来てくれる人がいたらいいなああって思ってた。」「自分に足りないことは中途半端だってこと。ちゃんと最後まで努力してみんなも僕がテレビとかでてたらこの人、小学校の時の同級生でって言うてに応援して。僕も歌でみんなのこと応援するから」まさに生の声本当の心の声、そして本当の彼の夢である。

「ほらこのお客さんの顔が一つ一つ違うのわかる」N君が「これは外国人？外国の人でも聞きに来てるんやな」(中略)

続いてクロスセッション。「私は留学して外国に行って外国と交流したい。New Sとかで外国と関係悪いから同じ人間として仲良くしたいと思います。だからこそ日本人としての基礎をちゃんとしたいです。やっぱりもう高学年だからちゃんとしなくちゃとふだんから思っていて、ちゃんとするの大切なことは礼儀と感謝です。人として当たり前だけど大切です。感謝は伝えにくい。でも心の中から伝えたい。これは私の夢だけでも私だけの夢でなくて、外国行かなくても、英語とかしゃべらなくても心が繋がってみんなで協力して明るい未来を作りたいんです」渡邊先生のおかげか、どの子も本当に心が育っている。

「話し方聴き方を原稿でチェックしてみて」と先生からの指示でみんなが原稿を自分の席へ原稿を取りに行く。もうすでに彼らは原稿なんか置いてきていることがわかる。自分の今の思いを生の声で語っている。

「渡邊先生が担任になってから人とかうやってしゃべったり反応することを学んだんだけど考えて言うことが苦手だったんだけどこうやって整理して話すと言うことを学びました」まさに彼は自分の思いを整理してそして自分の言葉で語る。

そしてここからは道徳。「夢を叶えるためにどうしたらいいのか」先生の熱い願いがここから託されている。子どもたちからは次々とこれからの自分に語る言葉が発せられ、先生はそのまま拾って黒板がいっぱいになる。

「先生も良く言うけど」「友だちからも聴いて納得したけど」と普段からの道徳教育が息づいている。ここでも子どもたちの言葉は次々繋がっていく。「小さい子が言うみたいだけどきばきと時間を使うこと」きっと自分を振り返っての身にしみた言葉だろう。みんなもそういう彼のいつもを知ってかにやにやす。「そういうことでもいいなら、計画を立てて行こう」「中途半端をやめることと似ているけど、継続すること」「あとつけたすけど、宿題をちゃんとやること」（笑）「もっと頭よくする」「ざっくりいったな」「足りていないところをちゃんと知ること」「あと、頭だけでなく心を鍛えるこ

とも」「いろんな人と関わって学ぶ事も大事」黒板に書かれた全てのことは、きっとそのまま中学校へ行行ってやってほしい渡邊先生から彼らへのメッセージだろう。最後に珍しく声を大きくして、熱く語った渡邊先生の「夢を持つこと。目標を持つこと」のひと言にYさんは椅子の向きを変え、きりりと真顔になって背筋を正す。先生の夢が語られたとき、私は個人的に、どうぞこんなすてきな授業をより多くの人に見せてより多くの子どもに与えてやってくださいと心で語っていた。

感動の授業であった。単なる図工の鑑賞の授業でないことは誰の目にも明らかで、いっしょに参観した院生の感想である。

この授業を通して自分の将来を真剣に考えてきたこと、だからこそ一つ一つの作品がとても細かい部分にまでこだわって作られたのだということが伝わる。真剣に向き合ったからこそ発表の言葉が子どもたちの真剣さを物語り、そこに込められた思いが子どもたちの言葉となって出てくる。作られた言葉でなく、本当にそう思っているからこそ子どもたちの一つ一つの発言に友達も耳を傾けその夢を応援する姿勢、互いを尊重する姿勢が浮かび上がってくるのだと感じました。

まさにここまでの挑戦が授業の中にも見て取れる。ここまでのあらゆる場面に自分の将来と向き合わせ、考えさせそれを表現させた長い長い挑戦がこの作品に込められている。だからこそ、子どもたちは自分の将来をこのように熱く語ることができるのである。自分の将来を熱く語り、それに向けてできうる限りの努力をしていこうとする子どもたちの姿に目が潤んだ。よどんだ社会に心痛めることの多い最近の教育情勢の中、光を見た気がする。それと同時に自分には一体何ができるのだろうかとなにかせねばと焦りに似たものまで感じた。これもまた彼女の挑戦かもしれないと思った。子どもたちの長い将来を大きな視野で眺めて育てる。それはすなわち、明日の日本を背負う子どもたちに一石を投じているのである。さらにこの単元計画は生きることのすばらしさだけでなく、生きることの難しさも投げかける。きれいごとでは生きられない現実の世界を味わわせ、本気で生きることに向かうこと。以下は、一昨年度の最後の

参観授業となった命の授業である。

今日の授業は私はこれまでの「アンパンマン」「10年後の私」のような最後の心ふるえる感動の渦と違って、さらに子どもたちがもっと考えたくなる、心重くなるそれがまた大事な授業であった。先生が言った「私の中にどこに持っておこうかというはっきりしたものがなかった」という言葉はまさにそのとおりで、先生はたぶん授業の中で子どもたちの様子から、落としどころを迷ったのではと思われる。しかしそれだからこそ子どもたちはそれぞれで、先生のねらいどおりではない多様な結論に至っていた。この題材は落としどころがない題材であろう。やっぱり猿は殺したらだめだ？人間は我慢すべきだ？共存の方法を考えるべきだ？猿の犠牲の下に人は生きてるから感謝すべきだ？どれも正解でどれも違う。生物は全て互いの犠牲の上に生きている。そこに「心の痛みを感じ、振り返り、決して傲慢になってはならないと戒める」しよせん人間はそれだけしかできない。その不条理こそがこの時間のテーマである。

「今まで愛してきた猿を殺すってありえんわ」「でもさあ被害受けてる人のことも考えると泥棒みたいなものやから、だめなことはだめって教えないと」とあくまでも正論のYさん。「だって村人はこういう地域やってわかってここに住んでるんやから」「こんな地域なんやからしかたないよ。殺す以外に方法があったはず」「協力しなかったら他の猿も殺すかもしれんやん。Yさんが言うようにルール違反なんだし」と加勢。「でもさあ、殺したくないよねえ。なんか方法ないんか。えさあげたりお供えみたいにしてさ」と今度は共存の方法を考え始める。

「でもさ、大切にしてきたものをめちゃめちゃにされるってどうなんだろ。人にも害を加えるかもしれんし・・・」

Yさんは悩み始めバロメーターを45%から48%まで動かす。

全体討議

「薬殺するために育ててきたんじゃない」「人のわがままだけで殺すなんて」とやはり村人悪者派の意見に傾く。「20年って一言で言うけど2

0年は永い。その20年の友達が殺されるなんて」といよいよ松岡さんの本音に迫る。B君の葛藤の台詞「協力すべきだと思っている。でも松岡さんの気持ちもわかる。」先生からTさん「村人だって殺したくはない。でも人までも殺すかもしれない。条件はそろった」とだんだんかわいそう論でなくしかしさるなんか論でもなく本質に迫った殺すべきでしょう論になっていく。「猿は村人に対して害しかない」「いいことはひとつもしてない」「殺して悪いことは何もない」とようやく村人の心境にせまっていく。しかしやっぱり「もともとはそこは猿が居た場所。そこを勝手に人間が侵略したんでしょ」「猿のいたずらじゃない」「猿だって生きるため」この台詞が出てこないと本当の命に繋がらない。たんにかわいそうでなく、ここで子どもたちは人間のエゴイズムに気づき始める。Yさんは、なんとこのとき「確かに」とつぶやきバロメーターをさらにずらす。

「人にとっても猿にとっても生きるって大切なんだよ」「人間が勝手にここに住み始めたんだ」「猿が居ること承知で来たんだもんね」話は確実に深まっていく。Yさんはバロメーターを眺めながらじっと考え込む。ここでまた全体での話し合い。子どもたちに新たな考えを深めていく。

「協力すべきと思ってたんだけどやっぱり自分勝手やったかな。」「猿はしゃべれない。人はしゃべれるから勝手なこと言えるけど」まさに人のエゴイズムです。「常習犯は次々出てくるよ。そうすると次々殺されるの？」そして最後「果たして殺すことが解決だろうか？」心震えた一言。

そしてとうとう最後のビデオ。このビデオがこの授業の難しさを表す。子どもたちは真剣な眼差しで画面を見つめる。葛藤の答えがあると思うからである。ところが松岡さんの答えは、私に言わせれば全くつまらない答えであった。

「もし断ったらこの先、猿の顔を見れないですよ。逃げちゃいけないあつて」

この答えに子どもたちは一瞬、何とも言えない思いが漂う。子どもたちは果たして殺すことが解決か！とまで思ったのに、松岡さんの答えは

ごくごく普通で結局は猿を殺すに至る。グループではすっかり意気消沈し言葉が出ない。（中略）しかしさすが渡邊学級。彼らの結論は「やっぱり人間はわがまま」。「人の立場を悪用している」「自分が満足ならそれでいいのか。殺す権利は誰にもない」この時点でついに彼らは松岡さんという人間も含めて人間は勝手だと批判する。その上でそれでも「人は人で生きていかねばならない。猿も猿で生きていかねばならない」これが本時の主題であろう。だからどうすればいいはないのである。こんな難しい道徳をよくぞやり抜き、そして最後の主題に行き着いたと感心しきりである。最後のお話の通り、食べられていることを魚は知らない。でも人間は魚を食べて命を犠牲にしていることを知らねばならない。前回と違って最後の瞬間にすがすがしさのないある意味重く苦しい終わりであった。（後略）

命を扱う際に誰もが感じる矛盾に迫る難しい道徳であった。彼女の長期にわたる挑戦の最後でなければ決してできない道徳であろう。世の中は、道徳の教科書通りには動かない。命を大切にといながら一方で戦争を繰り返し、他の動物の命を犠牲にして食を得てきた人間のエゴイズムに迫ることで、生きることは今考えるよりももっと難しいことに挑戦したのだろうか。ここまで育ってきた子どもたちだからこそ、うわべだけのとらえ方に終わらず、悶々と悩み苦しんだ。「アンパンマン」や「いろとりどり」で味わった授業後のさわやかな感動はなく、だからこそその難しさこそが人生であり社会である。卒業のカウントダウンに来て、また新たな挑戦を仕掛けた彼女に本当に敬意を表する。

この日が、私にとって彼らと対面できた最後の授業であった。半年ほどの間に彼らは彼女の挑戦を受け、多くのことを学んできた。それは単に教科の内容を学ぶというだけではなく、巣立ちゆくこれからの彼らの人生を見通した学びである。歴史学習の中にあった4つの柱は、その後の命の単元の柱ともなった。彼女の挑戦の根底にあったのは彼らに彼ら自身の人生を「よりよく生きてほしい」という願いであり、それはひいては彼らにそういう力をつけさせることでこの社会をよりよくする、というねらいもあったのかもしれない。

い。多忙、と言われる教員の仕事の中で研究主任の大役や6年生の主任を務めながらそれに甘んじることなく果敢に挑戦し続けた彼女の中には、目の前の巣立ちゆく子どもたちへの熱い願いが流れていたのである。

3. N小学校での実践をふり返る

（渡邊 淳子）

(1)卒業生を担当すること

「6年2組、解散！」

わき起こる子どもたちと保護者の号泣の中で、そう言った私は妙に晴れやかだった。卒業式を終えて、教室でのお別れのときのことである。いつもの卒業式なら、痛恨の涙が、真っ先にあふれているはずだ。もちろん、数々の苦い思いや達せられない思いは存分にあった。しかし、今回はなぜか何か違う、そんな気がしていた。

何回目だろう。卒業生を送り出すのは…。何回送り出しても課題は山積し、後悔もまたそのたびに異なる。そして、感動も。

しかし、卒業を目の前にすると、必ず怒濤のように押し寄せてくる思いがある。「何がしてあげられただろう、この子達に。」「もっとできることがあったのではないだろうか。」毎回、毎回卒業の悲しさとともに自責と後悔の念が胸を突く。そのたびに自分の力のなさを痛感するばかりである。

今回の卒業生は、当勤務校においては3回目、通算で7回目となった。毎回、卒業担任をするにあたっては、自分の中では2年間でしっかりしあげて、中学校に送り出したいという強い願いをもって向き合っている。今回は4年生からのクラス編成を経たものの、3年間のつきあいとなる卒業担任であった。4年生から6年生まで3年間の子どもの成長を見続けたのである。私の教員人生では初のできごとである。このことは、自分の経験の中では大きな意味のあることであったと、今、ふり返りながら思う。苦楽を共にしたという思いも強くある。3年間の幾多の試練の中で育ててきて、大きく成長を遂げた子どもたちを見ることができたことが、

これまでの卒業担任とは大きく異なる点だったかもしれない。

(2) 学びの土台を築く

4年生の出会いのときー。きらきらの目で私を見返す一生懸命な子どもたちの幼すぎる顔を思い出す。4年生に進級し、低学年とは違った雰囲気の中できつと緊張感もあったに違いないが、何よりしっかりとがんばろうという気力にあふれていた。一方私はというと、5年生での出会いが多かった経験の中で、そんな子どもたちをやや頼りない印象をもって見ていた。こんな幼い子どもたちと歩む一年間が想像できなかった。こんな幼い子どもたちがこれからどうなるのだろうとやや不安もあった。たった一年違うだけで、こんなにも子どもの有り様は違うものかと教師でありながら、あらためて実感したものだ。

まず私が取り組んだことは、毎度のことながら「楽しい授業」づくりである。奇しくもそのときは“コア・ティーチャー事業”で算数科の活用力を育む研究に取り組んでいた。このことが私の授業のあり方自体を見つめ直す、よいきっかけになったことを今にして痛感する。これまで当たり前に行っていた授業は果たして学び合っていたのか、本当に学力はついていったのかと考えると全く不確かで、教師としての自分の力に疑いさえもった。学び合うということはどういうことか、つながり合いながら考えるとはどういうことか、活用力を育む視点で今更ながらふり返るチャンスを得た。教師という職業は、ルーティンの罠にはまってしまったら、終わりである。常に目の前の子どもたちは違うし、日々変容するし、刻一刻と伸びている。それなのに私達教師が変わらないというのは、不条理である。その意味でも4年生を担当することができた私は幸運だった。一段下がって、学校を運営していく高学年という立場を離れ、やや気持ちの上ではゆとりをもって、自分というものを見つめることができたのである。

4年生の子どもたちの段階は、各教科の学習がいよいよ体系化されつつも、子どもたちには今一つ学習の全貌を理解するには難しい段階でもあった。ちょうど、本格的な学習への過渡期

にあたる段階でもある。だからこそ、この時期に、いかに学びは重要で楽しいものであるか、未来の学びはもっと楽しいものであるということを、うんと実感させたいと思った。常に私は、何よりそれが、よりよい学級集団の育成への近道であると考えている。それがたとえ、低学年であったとしてもである。

(3) 「chance challenge change」

いよいよ、4年生が修了し、クラス編成を経て、5年生に持ち上がることになった。ここからは、自分も慣れた状況であったが、決して守りに入るのではなく積極的に攻めようと誓っていた。新たな自分の世界を切り開くためにも、きつと自分にも子どもと同じように伸びしろがあると信じ、これまでの自分の中の慣例を捨て、整理しながら再構成していく機会にしようと思っていた。現状に満足するのでは、進歩は望めないと思っていたからである。どうしても、今一度自分の教師としての可能性を試したい気にもなっていた。

そのために、子どもと共に常にフレッシュな毎日を創る感覚を忘れないようにしたいと思っていた。ある意味これまでの教師としての自分というスタンスからではなく、子どもと共に歩む教師というスタンスを思い出すといった方が合っているかもしれない。それまでは、だんだんと経験を積むにつれ、傲慢になっていく自分もあり、長年の技におぼれる自分をリセットしたいという気持ちもあったように思う。そこでもう一度新たな気持ちで、子どもと共に進級し、あらためて高学年をスタートする気持ちを自然にもつことができた。

「chance challenge change」これが、この5年生での学級経営方針である。子どもたちとともに新しい自分を創り出すために、全ての機会を見逃さず、チャレンジし、自分を変える、子どもたちとともにそんな一年を歩みたいと思った。

(4) 教科関連の取り組みへの足がかり

そんなとき、今度は福井市で県の造形大会が

行われる運びとなり、図画工作科の実践を積む必要が生じた。正直、たくさんの行事や高学年の学習の流れの中で、時間を生み出すことはなかなか難しいことであった。しかし、ひるんではいられなかった。これを、マイナス条件ととらえるのではなく、プラス条件にしていくことでしか、この状況をクリアできるすべはない。図画工作科は、生きる力の根幹を支えるものだと思っている。ものをうみだす、あらたなものをひらめきだすことはすなわち生きていく力に他ならないのである。そう考えると、楽しくなってくるものである。図画工作科を主軸において、各教科の関連性を見直し、図画工作科と各教科・領域が相加相乗作用をもつように考えることにした。全ての学習は全てに活かされ、総合的な学力の総体となるべきである。どの教科も全て大事でかけがえのない学びを提供することこそ学びの本質である。特定の教科だけに終始したり、偏りがあつたりするのではだめである。その学習をしたことによって、他の教科・領域にもプラスがあつてこそそのものである。

さまざまな実践に取り組んだが、特に高学年の造形遊びの分野の実践に多く取り組んだ。高学年の造形遊びは、ただ自然や素材のよさを感じたりふれあつたりするだけにはとどまらない。自らが積極的に関わって変えていく視点も必要である。そういう学びの連続により、子どもたちの発想の多彩さや企画力を生む結果となった。そして、そういう図画工作科の実践を積むにつれて、他教科の学力も上がるという事実が生まれた。学びへの意欲が増大したのである。あくまで、主観的な評価でしかないが、課題に向かうという意欲、課題をクリアするために必要な発想力、具現化するための技能などいろいろな力が伸びることによって、いわゆる学力もあがつたのではないかと考えられる。

何より、この5年生の一年間を通して、子どもたちの日々の活力、ものごとに向かってチャレンジしていくエネルギーの高さに驚いた。こういうことなのである。気力さえ充実すれば、どんなこともできるし、それが課題解決力であり、活用力の育みとなるのである。

言うまでもなく、造形遊びなどは、人とのコミュニケーションも重大な要素となる。人のよ

さや自分のよさに気づいたり、創意工夫しながら話し合ったりする経験を十分摘むことができたことは、大変プラスになった。

そんな中で、子どもたちは連合体育大会、体育大会、器械運動交換会とことごとく大きな行事の中で立派に成果をあげていった。そして、ついには、「6年生を送る会」で、卒業生、在校生に感動を巻き起こすものをつくりあげることとなったことが、最終学年6年生に進級するための大きな自信となったのは言うまでもない。あの日の子どもたちとの涙のふり返りを忘れない。「やればできる。」シンプルながら、「人は変われる、チャンスさえあれば、変わろうという意志さえあれば」そう子どもたちが実感できた一年間であつたとも言えるのである。

(5) 6年生の一年間と卒業の意味

そして、とうとうたどり着いた6年生。子どもたちのこの6年生という学年に寄せる思いは、私が想像する以上のものがあつたように思う。5年生の最終から、子どもたちの思いは消えていないのである。進級という区切りはあるものの、その延長線上に「もっと自分達の力で何かを成し遂げたい」という思いがつながっていたのである。これは、私にとっては大きな衝撃と驚きであつた。子どもたちに、よくあるお仕着せられた、6年生の面倒感は一切なかったのである。何と言っても、多くの場合は、担任はその6年生としての自覚を養うこと、責任をもたせるために、苦勞するものと決まっていた。ほとんどの先生は卒業担任になれば、6年生として恥ずかしくないように、必死でそう教えるものである。しかし、違っていた。既に、それぞれが自分なりの目標をもち、自分なりのリーダーとして最高学年としての生き方を見つけようとしていた。

卒業とは自立の土台の完成であり、自分の夢や生き方について考えることだと思っている。常に自分を見つめ、課題を発見し、前向きに取り組む挑み続ける姿勢こそが卒業の意義であると考え、指導してきた。その中で自己肯定感や他己肯定感を味わうことができれば、次への道に続くはずであると信じていた。時期が来たか

ら、卒業するというのは嫌なのである。卒業してからでも自分の力で自分の人生を切り開いていく子になってほしいのである。そのための栄養分をしっかり蓄えて卒業してほしい。まさに巣立ちである。この巣立ちの感動があるからこそ、卒業担任はつらくてもがんばれるといってもよいのである。卒業は感動のドラマである。しかし、表面上の感動では、子どもたちには何の力にもなっていない。内よりあふれ出る、わき起こる生きる力の裏付けのものと感動でなければ全く意味はない。

(6) 6年生の学級経営の背景

私は、ちっぽけなことにとらわれず、将来につなげるための気持ちをもつ子を育てていきたいと考えた。なぜ、学ぶのか、なぜ生きるのか、なぜがんばらなければいけないのか、常に考え、常に真摯に問い続ける、いわば‘哲学集団’のような学級をつくり上げたいと願ったのである。教師の指示に従って、まちがいのないようにルールを歩く子どもなんぞはごめんだと思っていた。日々創造、日々進化、日々新しい、日々感動のあるクラスを創りたいと思った。私は日々創造性あふれる子どもの中で、絶えず何かに働きかけ変え続けていくエネルギーにあふれる教室で、子どもたちとともに学び、進化したいと願ったのである。

教室のムードは、そう願った通りになった。こんなに楽しい一年間は、これまでの私の教師人生の中にはなかった。毎日が、楽しくてしょうがなかったのである。なぜこんなに「楽しかった」のかを思い起こしてみる。

その一つは授業づくりである。子どもたちとつくり上げる授業とはこんなに楽しいものであるということを、「はじめて知った」と言って過言ではない。みんなが授業に意欲的に参加し、意見を述べ、討論し合意形成したり、理解を深めたりする。どの教科も手を抜こうとしない。何にでも興味を示すため、いろんな示唆ができる。そのことについて、また調べてきたり発表したりする子が出てくる。算数ができない子は、できるようになりたいと努力する。私自身が子どもの探求心や向学心に応えようとすることで、

よりよいサイクルも形成されていった。教師と子どものお互いが学び合おうという姿勢をもつことができたのである。こうして、毎日が新鮮な学びの連続になれば、楽しくないわけがない。当然それは私自身の楽しみでもあったわけだ。

二つ目は、道德教育の充実である。教科の関連性の中で、道德を核にしたり、逆に道德を発展的に取り組んだりした。道德教育が根底にあれば、思いやりの心をもって前向きに生き抜くことができるはずである。途中で投げ出さないで、人生をしっかりと自分の手で紡いでほしい。卒業の意味を完成させるには、どうしても欠くことのできない部分だった。そこに教科の関連性を活かした図画工作科の可能性を探りながらの実践に取り組むことができたことは大きい。(参考：福井大学教育実践研究 第39号 59-70 掲載)たとえ十数年しか生きていない子どもであっても、自分の生き方を見つめ、よりよく生きていこうとする意志をもった子どもを育てたいと思って取り組んでいた。

三つ目は、自治である。学級会や委員会、学校行事などで子どもたちの発想意志が次々と実現されていくように仕向けたことである。まさに、いい意味で学級王国である。それは先生による学級王国ではなくて、子どもたちによる学級王国の形成なのである。自治・運営していくことで自治の楽しさを知る子どもたちは、学級から外に学校全体に波及していく。いろいろなところに目を向け、新しい何かを企画運営していくのは楽しいものであるに違いない。あいさつ運動・残菜ゼロキャンペーン・たてわり活動・シャツ in 運動・ペットボトルキャップ回収などなど、これまでにない発想で学校をよりよくするために、考えて行動していた。それが子どもたちの生きるエネルギーともなっていたのである。

(7) この3年間を通しての学び

この卒業生を担任できたことで、私自身が大きく変わることができたのは、ほぼ奇跡であると言えるかもしれない。教師は子どもの一段上ではない。上からは上からの景色しか見えない。子どもたちが今何を考え、悩んでいるのか当た

り前のことに気づいて見守ること、支えること、そっと背中を押してやること、それが教師の役目である。そして、先に行くものとしてしっかり学ぶことがいかに大事であるか、自分の生き方に責任をもつことがどんなに大切であるかを、教師の責任で考えさせなければならないということの意味に気づくことができた。時間さえすぎれば卒業していく。その日になれば、皆卒業していくだろう。しかし、それではだめなのである。これからの生き方の芯となる部分をつかってやれなければ、だめなのである。そう考えると、教師の資質は高まらなければその援助をしてやることは不可能である。だからこそ教師は常に伸び続ける必要がある。伸び続けるためには、常に自分をふり返り課題を見つけ、変えていくきっかけをつくり出せなければならない。そのきっかけは日々の生活の中では、なかなか得難いものである。日々忙殺される教師という職業の難しさである。しかし、きっかけはほんのささいなことにすぎないものである。敏感にそれに気づき、ほんの少しの変化を促すようにするだけでもよいのだと思う。しかし、それを怠ると、みずみず伸びるチャンスを逃してしまう。そうして、毎日があっという間に過ぎていってしまうのである。

そのチャンスをどうつくり出すか、最終的には自分次第なのである。そのチャンスを逃がさないようにしてほしいという願いを込めて、「せんせの教室」を開講するに至ったのは、この3年間の担任生活が大きく影響している。この担任生活がなかったら、私は疲れ果て、ただ教師生活を全うすることだけに腐心する人間になっていたかもしれない。そういう大きな転機を与えてもらった私は、本当に幸せだったのである。人は目標をもつと、強い。目標を成し遂げるためにどうすればよいか、何が足りないか考え、何としてもやり遂げようとする。それが課題発見につながり、自分自身の気づきになり変わるエネルギーになるかもしれない。

ふと、今でもリフレインする忘れられないシーンがある。

卒業式の最後に、退場する子どもたちを泣きながら見送る私に、一人の卒業生が立ち止まって、こう声をかけたのである。

「先生、笑って」

呆然とした。突然、幸福感が大きく私を包んだ。そうなのだ。この卒業は、悲しくなんかない。この子らの巣立ちの記念すべき、瞬間なのだ。ありがとう、君たちー。先生に愛をくれて。

彼らの背中を見送る私には、もう幸せ以外の何の思いもなかった。

4. 附属小学校1年生を育てること

（小林 真由美）

(1) 教室は・・・するところ

6年生を送り出したあと、彼女もまたN小学校を後にして、附属小学校へと異動した。ほとんど高学年しか担任したことのない彼女が、人生でたった1回しか経験のない1年生の担任となった。大人顔負けの深い語りをしていた6年生を育て上げ、今度は小学校の入り口に立つ。あうんの呼吸で授業を共に作ってきた6年生とは勝手の違う相手に、戸惑いも多かったことだろう。しかし、まだ日も浅い5月、「院生に授業参観させてもらえないか」という私の勝手な申し出にも、「いいよ」と二つ返事で授業を開いてくれた。しかし、ここでもまた私は彼女の挑戦に驚く。

教室に入るとかわいい子どもたち、普通なら仕組まれた「こんにちは」があるところだが挨拶なんて全く考えてない様子で、正直に「え？だあれ」「また、はいってきたあ」とそのまま思いを述べる。「黒い人いっぱいいるねえ」と先生も見たまま笑う。「こんにちはって言いなさい」とは言わない。

名人の技があちこちで垣間見える。突然、小さな声で「前に集まりましょ」この切り替えが何とも上手。子どもたちもそっと集まる。



前に行く楽しいことが待っているからか、み

んながあつという間に前で上手に半円に座る。
「ミニーちゃんからお話あるって。今、起きたんだけど」「うふふ」ミニーちゃんに代わりに話をさせるのが効果的！子どもたちの目が輝く。一生懸命顔を上げて聞こうとする。明らかに渡邊先生が話しているのに、渡邊先生を見ず、ミニーちゃんを見る。ミニーちゃんは学級の中の特別な存在として渡邊先生と別に捉えている感覚が私には不思議。「みんな、これまでどんなことをした？」一瞬何を答えて良いかわからない様子。「学校探検したね」例が挙がって納得し手が挙がる。ミニーちゃんが気になる女の子たちはミニーちゃんを触り出す。渡邊先生の顔を窺うが、渡邊先生は、先生に戻って「さわってはいけません」とは言わないで、ミニーちゃんに徹し続ける。いくつか例を挙げて何を言えばよいかを示した後、「グループでお友達と話してみしょう」

「だれからいうの」「・・・」「こうまわる」順番に話す事を無意識にルール化しようとする「こう、まわそう」「こう、まわそう」Sさん、Hくんは指で示して意見するが互いにかみ合わずなかなか話し合いは始まらない。Tくんが「こういうまわり方でいきます」と決定。「お勉強」とTくんが1番手をきったが、次は続かず「次だれ」「順番か」とまた順番の話題へ・・・

「何したかなあ」Tくんはアイデアが次々浮かんできて「当番」自分が言いたくて挙手して「黒板消し」Sさん「・・・」と行き詰まっているとSさんを指さしてTくん「あ、Sさんは今、考えてる！」「教室で考えた」（笑）「チョウをかいだ」「んーじゃ学活やった」「国語」「道徳」Tくんが連発し「僕ばかり発表してる」。毎回手を挙げて言うのがかわいい。Sくんは話を聞いていない様子で姿勢が崩れる。RさんはだまってTくんの発言を聞いている。Sさんは自分に挙手していると判断しTくんを見つめて「はい」と指名する。何か言いたいと思うもののTくんが次から次へと言うので自分の中で言葉がまとまらない。まだまだ1年生は相手の話を聞き取る力がついていないので、互いに絡み合いのチャンスがあっても流れてしまう。一つとんちんかんな発言が出ると互いの会話の流れが修正できず

、とぎれて終わってしまう。渡邊先生は上手に机間巡視。子どもの様子をみて「これ、20分ももたないなあ」と独り言のように言って、「チン」の合図で話し合いをいったん終了する。

（中略）1年生で再度クロスセッションに挑戦する。ひとまず一人移動してスタイルを見せて、もう一人移動。先生は、1年生がどこまでなら自由にできるかをきちんと把握し、可能な範囲で、



再び「チン」「残った人は動きましょ」今度は2人いっぺんに動く。ほぼスムーズに、あつという間に動くのもすばらしい。普通なら「あつちへ行きたい」「こっちはだめ」と必ず混乱すると思われるが、どうやって移動すればよいかも認知し、どの子どもどのグループも受け入れる人間関係もできている。

（中略）

「じゃ、グループで話したことをお話してください」と全体共有。「紙に数を書いてビンゴゲームした」「保護者会の時・・・」笑いがおこる。きっと保護者会の時の楽しいエピソードがあったのだろう。「柏餅に歯をもっていかれた」さらなる笑いがおこる。先生も楽しそうに「ああ、あれは」と楽しかったシーンを共有する。先生は6年生にしていたように「つないで」という。意図的指名はしない。あくまでも子どもに添って子どもといっしょに授業を作っていこうとする。「えー、また〇〇さん？」と不満の声。でも先生は気にしない。この不満の声は、指名した子どもに聞こえている。不満の声を聞

いて少しずつ指名する範囲が修正される。

「はい、じゃ、みんな一斉に言って」ってこの一言はすごいチャレンジ。授業の中で指名されずに勝手に言うとうるさいからと、低学年の先生はよく「手を挙げて発表しましょう」と規制する。しかし、これがつぶやきを消してしまう。規制を解いて自由な語りを授業の中で育てようとする先生の思いがよくわかる。しかし、ここがまた1年生、一瞬どうしていいかわからずしーん！しかし口々にいい足りないことを言い切る。

（全体共有）

「教室は」「するところ」のカードが出されて私にもようやくねらいがつかめてくる。

「勉強するところ」「おともだちとなかよくするところ」「あたまをよくするところ」とどうしてこの子たちは今ここで出てきた一つ一つのエピソードを総括して発表することをつかんでいるのだろう。一つは渡邊先生の何気ない板書。エピソードを囲みながら黄色字で書かれた意見は今までの出来事をまとめていまいしょうなどと言わなくてもまとめたくなる配置。すばらしい。だから上の方を空けて、書いていたのか・・・とようやく気づいた。そしてもう一つはこの「教室は・・・するところ」という課題設定。それぞれのエピソードを総括する必要がある課題である。そして先生からはさらなる難題「教室をすてきな場所にする合い言葉を考えましょう」

（中略）先生はもちろどれが一番いいとは回答しない。ここでミニーちゃんが登場。ミニーちゃんのお手紙はきっとこの問いの答えだろうみんなが「みえんよ」と文句を言う。お手紙は付箋で覆われ、何が書いてあるのかちょっとわくわくする。「あ」「あったかいところ」「い」「いっぱいはなすきく」「う」「うんと考える」「え」「えがおでがんばる」「お」「おおきくそだつ」の5つが提示される。「あったかいところ」は子どもたちから出てきた「おともだちとなかよく」だろう。ちゃんとミニーちゃんがお手紙として贈った言葉は1年1組の子どもたちから出てきている。「い」の「いっぱい、きく、はなす」や「うんとかんがえる」は「あたま

をはたらかせる」「あたらしいことをおぼえる」とつながる。しかし、渡邊先生は子どもたちの様子を見て、ミニーのお手紙に固執することなくさらりと読ませて終わる。「お」はなんだろう、の問いかけに「おわり！」と答えたセンスに妙に喜んだ渡邊先生を見て、これこそが渡邊学級が楽しく育っていくエッセンスなのだなと思う。もしかしたら「おおきくそだつ」と同様に「おわり」とこたえるセンスを身につけることも渡邊先生の願いかもしれない。最後の元気な歌声が生き生きしている。きっとこの一年、もっともっと大きく育つことだろう。

昨年度の6年生ほど、あうんの呼吸ができあがっていないくて、そこを苦戦しながらも、新たなわくわく感を投じて、がんばっている姿に、教師の本当にあるべき姿を見た気がする。一時間の中に渡邊先生のこの一年の挑戦が見える。授業名人の技を駆使して、算数や国語の授業を公開することは容易であつただろう。後の研究会の中で「周りの先生方からは、『こんな難しいことやめておけ』と言われました」と本音を語る。「でもやめておけと言われると、余計にやってみたくなるんですよ」と苦笑いする。グループ活動だけでなく、クロスセッションまで取り入れてメンバーを交代しての話し合い活動。ねらいとした「学校の目的」という内容も相当に難しい。しかし、年度の最初にこれを伝えておきたいという熱い思いは、1年生の子どもたちへ是非伝えたかったことであり、これから教員を目指していく院生へのメッセージでもあり、そして何より渡邊先生自身の自分の学級経営への指針表明ではなかったか。「教室は子どもたちといっしょに一生懸命学んでいくところ」「教室は子どもたちを大きく育てるところ」「教室はみんな笑顔の温かい場所にしていくところ」そう伝えながら、自分自身への挑戦のスタートを切ったのだと感じた。

そしてさらに驚いたことは、この授業はおおよそ1年後の3月に続いていたことである。

(2) 2年生へジャンプ

この一年間にもたくさんの授業を参観してきた。その授業の内容については彼女自身が後述す

る。常に感じたことは、授業の根底に流れる大きな理念と挑戦である。「子どもをこう育てたい」という強い願いと「こんなことまでできるだろうか」というチャレンジは、子どもたちを大きく変化させた。毎回授業を見に行くと、子どもたちの成長が大きく見える。個々の育ちに加えて、学級全体の集団の育ちも然りである。以下は最後の3月に参観した学級活動である。5月の授業の締めくくりといえるこの授業を通して、彼女がこの一年に取り組んできた成果を見ることができた。

教室の掲示物には後ろに1年の歩みが、壁面には4月と現在の自分の名前を書いた者が貼られていて、子どもたちがこの一年の自分と学級の育ちを常に意識できるように、工夫されている。本日の授業もこうした掲示物も先生からの、子どもたちに対する熱いメッセージがうかがわれる。授業の中でも子どもたちもしょっちゅうこの掲示物に目を向ける。(中略)



「この一年、いろんなことがあったね」「トリムパーク？へいきました」と一人が例を示すと一斉に手が挙がり、「縄跳び大会」・・・と次々思い出が語られる。ほとんどの子が手を挙げる中で、Nちゃんは黙って友だちの発言を聞いている。時々頷きながら発言する友だちの方へ顔を向け、よく人の話を聞いている。友だちが「リースです」という思い出があるのか「うふっ」とにっこり。間違いなく友だちの言葉をよく聞いている。先生は適度なところで切り上げてここで、本時のねらいを提示する。「やってほしいことがあります」と一言。どの子も「なんだろう」と興味津々で黒板を見る。「一年間をふりかえって・・・」と書くと、子どもたちは「みよう」と

続ける。ここもあうんの呼吸だが、「みようだ」と思うでしょ！」と素敵な切り返し子どもたちはいっそう興味津々。黄色のチョークで「二年生につなげよう」と続ける。さすがの名人技。「振り返るだけでなく二年生につなげることが大切」と先生のねらいであり願いを語る。「がんばったこと、できるようになったことってなんだろう」

「最初は計算が遅かったけど、できるようになりました」と上手に変化を語る。

「縄跳びが20秒くらいしかできなかったけど、もう2分ぐらいになりました」今度は数値化して変化を語る。しかも20秒と2分をそろえて提示する！！聞いていた子どもたちからは「いや、ほんとの最初は2秒だよ」とこれまた2をそろえて数値化する。『そんなことが言えるようになったことが、できるようになった事だよ』と私は密かに心の中で、拍手する。「前飛びしかできなかったけど二重跳びができるようになりました」と今度は縄跳び自体のできないではなく、技を高度化して難易度を示す。発表そのものがなんとレベルが高いこと！変化の様子が確かな言葉で語られる。

ここで先生の温かな子どもたちへの愛情が投影されたビデオを提示する。

入学式のシーンからスタートする。「小さい！」「こんなんやったっけ」と改めて自分たちの成長に気づく。様々なシーンが流れて子どもたちの心に刻まれる。思い出の大きいことにはリアクションも大きい。「くじらぐもだ」「エルフも」と印象的な学習の内容も蘇る。「給食の準備も上手になったね。初めは教頭先生とか手伝ってもらって。今はもう先生も手伝いません」Nちゃんは頷いて、ますますにこにこ。みんなも誇らしげ。「風邪をひく人もいなかったよ」というと待ってましたとばかりに「先生がひいた！！」とみんなが口々に言う。子どもたちと先生のこの一体感は、ちょうど一年前の6年生との一体感と変わらない。渡邊学級のできあがりである。

ビデオが終わって「じゃ今度はがんばったこと、できるようになった事を考えてみて」「でも」と付け加えて課題提示「なにがだいじとわか

ったの」「どういうところにきをつけてがんばったの」「どんな子になるためにがんばったの」となかなか難しい課題。言えるかなと案じたが柔らかに「自分がどんなことをどんな風ががんばったのか話してごらん」と少しハードルを下げてあげる。

Jくん「最初、学校来たときは前飛びしかできなかったけど、あや飛びできるようになって今は二重跳びできるようになった」「次はだれ」

「男、女、男、女って言おうよ」と提案されRちゃんが話し出す。「最初学校に来たときは、」とJくんの出だしを真似て話す。「算数とか国語とか得意じゃなかったけど」「え？今は得意なの？」と突っ込む。ちょっといいあぐねて「上手になった」と言葉をチョイスする。得意とは自分で言い難かったのか、上手になるという言葉で変化を表現した。「体育の時、跳び箱飛べなかったけど飛べるようになった」「私もだよ。幼稚園の時は・・・」と自分のことを語り出す。互いの話を聞き、それを広げたり、活用したりしながら話しを交わし合う。5月に今ひとつかみ合わなかった話し合いが、本当にスムーズに流れている。「聞き合う」をテーマに掲げてきた附属小の取組も、立派に1年生の幼い子どもたちが上手に聞きあえるようになっている。互いを見つめ、耳を傾ける姿にちょっと心熱くなる。

「友だちのを聞いて思ったことを教えて」と全体共有。

「昔も上手だと思っていたけど、ほんとに初めは上手じゃなかったんだと思いました」と。以前の友だちへの評価は、今考えると十分ではなくその頃の自分の評価が甘かったのだと振り返っている。「今はずいぶん字がきれいになったと思いました」友だちの成長も捉えることができています。

「じゃ、1年2組のよかったところは」と過去の自分から今の自分、過去の友だちから今の友だち、そして全体としての学級の成長と徐々に課題の視野を広げていく。

「みんなで協力し合って活動できる」「1の2の子はみんな声が大きくなった」「1の2の子はみんな歌がうまくなった」子どもたちの発言

にちゃんと「みんな」「1の2」「～なった」というキーワードが含まれる。

1の2のよさについてグループで話し合う。

まずはすぐにTくんが「ギャグ」と書く。Jくんは「ギャグののりがいい」と説明も書く。2人で見せ合って嬉しそう。女の子たちに「だってこれはほんとだよ。みんなも書いてよ」「くじらぐもは」「ああ、それって勉強とか発表とかできるってこと？」とJくんは単語で表現される事実を良さに直そうと説明を入れていく。掲示物を見ながら「運動会」とRちゃん。さっきの思い出とごっちゃになってきてしまうが「運動会じゃわからないでしょ」とJくんが訂正し「運動会がどうしたのさ」とグループで正す。Rちゃんが却下されてしまい、ちょっと沈黙が続いて「じゃ造形は」とNちゃんが意見を言う。「造形も結構すごいよ」「絵がうまいってこと？」とJ君が解説して直す。（中略）

全体共有

J君は自慢げに「ギャグ」と発表。「先生がおもしろい」と付け足す。みんな先生が大好き。「みんなが友だちになった」「優しい子が一杯いる」「うん、そうね。先生もほんとにそう思う」と温かくフォローする。「字がうまい」「そうだね、みんな旨くなったもんね」と壁面の名前を指す。次から次へとたくさんの自慢が黒板に書かれる。

けじめをつけてやや大きめの声で「はい、ここからが大事です」とねらいに迫る。「これから2年生になるために、・・・どうするか」「どんな2年生になるといい？」子どもたちの顔にもちょっと緊張感が走る。「グループで2つかいてください」

グループで話し合い

「私2つ思いついた」「じゃ言ってみよう」「そうだよ、そうやってちゃんと言うことが大事なんだから」と話し合いの意義にまで発展する。Nちゃんが「優しい2年生ってどうですか」と優しく聞く。「字がきれいな2年生は？」「そんなになりたいか？」と実際に自分の描く2年生を照らし合わせる。時間になってしまい、困ったNちゃんはとりあえず「優しい2年生」「字のきれいな2年生」とかく。

全体発表でNちゃんは書かれたボードをしきりに眺める。Jくんに「優しい2年生って多いね」と語りかけJくんも「それいいもん」と2年生になった姿を描きながら2人でつぶやく。



最後に「あったかいところ」「いっぱいはなす、きく」「うんとかんがえる」「えがおでがんばる」「おおきくそだつ」と5月に掲げられたミニーちゃんからのお手紙が提示される。

(後略)

国語かな、算数かな、図工かなと思いつつ参観すると、この一年の成長を振り返るという学級活動の授業である。しかも、この授業は5月の授業の続きとなっている。最後の場面では忘れもしない「教室は〇〇するところ」で出てきた「5つのあいうえお」がスクリーンで出される。5月の授業で、この5つに固執せずさっと流したのは、この授業への伏線であろうか。「あ」「あったかいところ」「い」「いっぱいはなすきく」「う」「うんと考える」「え」「えがおでがんばる」「お」「おおきくそだつ」はこの一年間の大きな目標で、5月の授業のねらいではなかったのである。今更ながらに、長いスパンで授業を組み立てる彼女の構想に感服する。それは子どもたちにとっても同じだろう。子どもたちの感想から抜粋して示す。

きずかないうちにみんないいことをしてきょうふりかえてみたらいいことをいっぱいしてびっくりしました。2年生になってもいいことをいっぱいしたいです。えも2年生になってもじょうずでいたいし、ともだちもなくさないようにしたり、けんかをしたらすぐにあやまってともだちをなくさないようにしたいです。おべんきょうもこれからがんばりたいです。

目先の授業だけをこなすのではなく、子どもたち

のあるべき姿に願いを持って授業を作る先生の熱い思いがよくわかる。それは子どもたちにそのまま伝わり、一年間を通しての大きな成長が子どもたちの言葉の中にも見られる。「いいことをいっぱい」「こんなにできるようになって」と自分ながらに驚く成長は、渡邊先生とともに、彼らがつねにたくさんの挑戦を続けてきた成果である。それを振り返りながら子どもたちもまたよりすばらしい2年生への思いを募らせている。「最後に来てくださった先生に1の2の上手な歌を聴かせて上げましょう」と言われ自慢げに元気よく美しく歌う「旅立ち」を聞かせてくれた姿に、昨年度の6年生と全く同じものを見た気がする。6年生でも1年生でも彼女の子どもに対する思いは変わらない。そしてその思いがあれば、どの子どもたちにも同じようにそれが伝わり、たとえ1年生であろうとも自分で考え自分で学び、そしてそんな自分に誇りを持って育つのだと感慨深い思いに駆られた。

5. 附属小学校1年生の実践をふり返る

(渡邊 淳子)

(1) 1年生との出会い

二度ともうこんなに愛せる子どもたちに出会えないのではないかと。卒業担任をした子どもたちを手放すたびに、恐怖感におそわれる。次の子どもたちを愛せなかったらどうしようかと不安になる。そういうことを繰り返しながら、教師として歩んできた。しかし、うれしいことに毎回それは危惧でしかなく、必ずまた愛しいクラスの子どもたちを前にして、かわいく思える自分に、ほっと胸をなで下ろす。「よかった、また愛しい子どもたちに出会うことができた」と。

しかしながら、今回はその不安がより大きかったのは、単に卒業生を送り出したということだけでなく、自分の中では一つの節目を終えた感があったからでもある。加えて、1年生という、自分にしてみれば、いわば未知との遭遇のようであったことが大きい。これまでの経験の中では、わずか一度しか1年生を担当したことはなく、しかもそれは十何年前のことで、記憶もあやしいほどである。それこそ、本当に子どもたちが愛しくなるには、ほど遠い気がしてならなかった。

そんな不安を抱えたまま、迎えた4月一。

子どもたちと私は、深い緊張感と期待感の中にいた。しかし、何とかうまくやろうと必死だった。何とか自分の学級という実感を早くもちたいために、あらゆる手だてで子どもとの距離感を詰めていこうとしていた。

そして、1年生を担当してあっという間にギブアップしそうになった。不自然な関係づくりは、無理が多いからである。1年生の入学当初は、生活面や幼小連携の面で配慮しなければいけない点ばかりである。学習以前に、生活面や人間関係作りが重要なのである。はじめの一步が、今後の学校生活を左右する。そう思うと、なかなかプレッシャーもかかり、難しいことばかりである。本当に少しずつ、一つ一つを丁寧に教え、一緒にやっていくことで学力の礎となる見えない学力のもとをつくっていくのである。そのことを今更ながら痛感し、自分が高学年でしてきたことの背景には、その見えない部分の積み重ねがあったことをあらためて知ることができた。こうやって学びを重ね、つなげながら子どもたちは一年一年育ってきていたのである。

そういった意味で、今回1年生を担当することは、教育の根幹から見つめ直すよい機会だといってよかった。しかし、頭ではそう理解できていても、実際子どもたちを目の前にすると、途方にくれることもしばしばあった。いくら教えようとしても無理なのである。そう分かったのは、日々の諸々によほど疲れ果て、しばらくたってからである。いくら教師ががんばっても、子どもたちなりの学びに即しなければ、学びを構築できないのである。むしろ、その機会がいつ来るのか、ちゃんと伺っていなければならないのである。大きく包括的な視点で子どもを見つめ、育てる姿勢が1年生担任には必要だった。あわてても何も変わらなかった。

(2) 1年生の学びとは

しかしながら、子どもたちを見ていると、ただ1年生というだけで、ちゃんと考え学ぼうとしている姿に驚いた。そう、子どもはもっと学びたいのである。学びを欲しているのである。これは、感動ものである。たとえ小さくても、学びを得よ

うと努力し、獲得しようと必死なのである。だからこそ、1時間1時間の授業はとても大切で、子どもの学びの感動を失わせてはいけなかった。子どもたちは真っ白の心で学びをおもしろいように吸収していくのである。そして、かつて活用力とは何かを研究した意味を、これほど目の当たりにできることはないと思えた。1年生の子どものもっている知識の総量は限られている。その限られたものや経験を使って、何とか学習の意味づけや論理を展開しながら、新たな学びをつくっていく子どもたちの姿は、まさに学びの真髄であろう。だからこそ、できたことをほめ、賢くなったことを認めてあげることが、自然に心からできるのである。みんなが認めてほしいのはこういう理由からである。みんな力の限り考えて、分かるしできるようになった喜びを伝えたいし、共有してほしいのである。子どもの気持ちになって、一緒に学んだことを喜んでいる授業を私は楽しいと思えた。

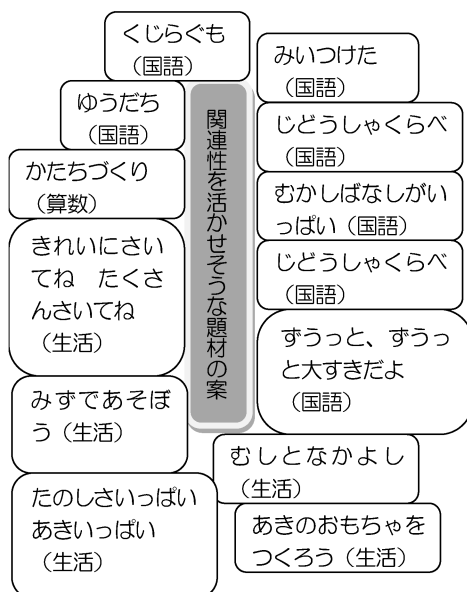
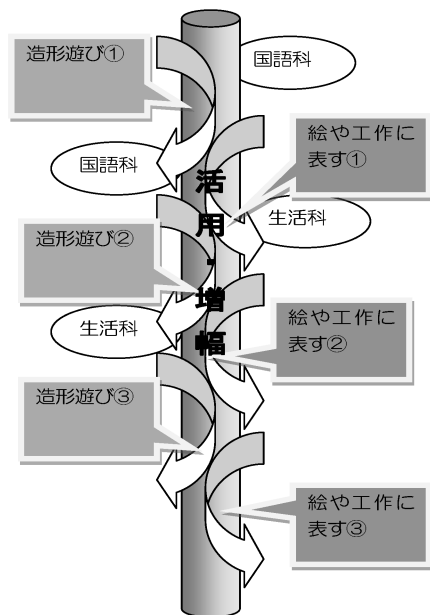
しかし、もう一歩進んで、もっと深い学びを提供できる授業をもつくっていけるのではないかと考えていた。無謀かも知れないチャレンジを私は、何も経験がない自分をいいことに実行することができた。結果、子どもと共に疲労してしまうこともあったが、だからこそ子どもとともに成長できた自分がいたのではないかとも思える。

(3) 教科関連の中で子どもを育てられるか

それが、教科関連を活かした授業づくりのチャレンジにつながった。一年生でもいろいろな知性や経験値をもとに、豊かな感性を土台に自分を表現できるのではないかと考えた私は、造形を軸としたいいくつかの統合的な単元を構成した。低学年の時期に大切なのは、「豊かな情操を育む」ということだ。知性と感性のバランスよい発達が、確かな学力の土台であり、生きる力のもとである。感性のないところに学びは成立しないし、発展もない。知性と感性は切り分けることが難しいものである。そして、その感性の教育が難しく、学力の名の下に軽視される傾向にあるのは悲しいことである。しかし、今回は今の段階にしかできない造形の学習をうんと経験させた。しかし、これはなかなか根気のいることであつた。簡単になしえることではなかった。途中何度もあきらめた

くなったが、そのたびに子どもの心から楽しんでいる。その笑顔が私を救ってくれた。

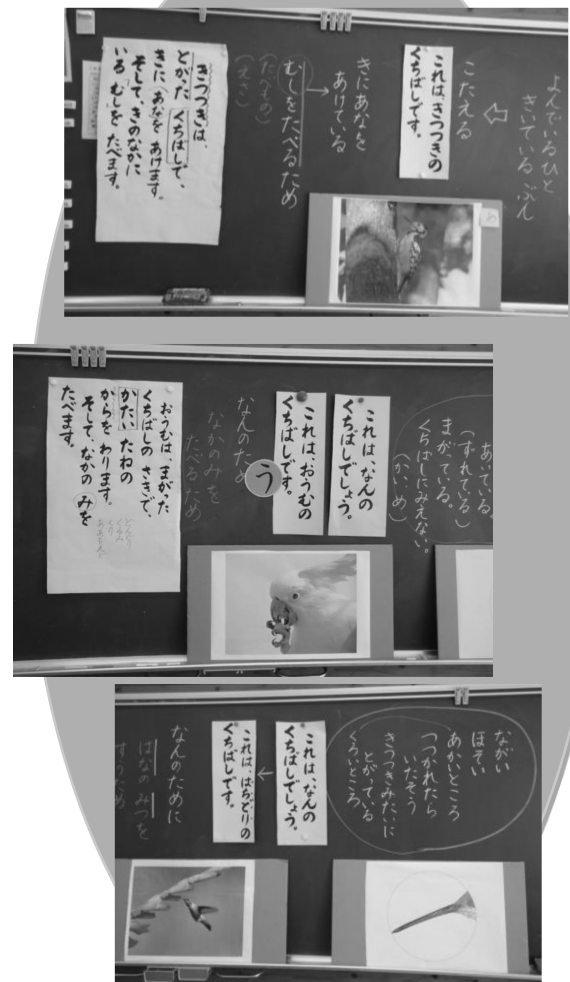
●造形…一連の造形遊びと教科関連の学習より



大変な時間と労力を要したが、子どもたちの視点や発想力は広がったように思う。また、言語活動を大事にするなかで鑑賞や国語との関連を大事にし、思いの表出につなげた。初めは、子どもの実態が理解できていなかったため、うまくいかなかったことも多かった。しかし、チャレンジすることで大事な今後の方針を生み出すことができたように思う。

●国語科の授業実践との関連性を活かして

国語科の授業より
(光村図書：1年上)



初めての国語の説明文の学習である。そこから造形との関連を活かして「いろとりどり」の題材に発展した。ここでは、言語活動の充実をめざして、「鑑賞」学習にチャレンジしたが、1年生の子どもたちの鑑賞のあり方としては、難しく大きな課題を残すことになった。

こうした、いくつかのチャレンジの中でもだえ苦しみながらも、子どもたちは表現の楽しさや深さに気づいたようだった。また、いろんな手法で自分なりの思いを表現する自分や友達のよさに気づくことにもつながっていったのではないとも言えるので、大事なチャレンジであったと思っている。

また、こうした造形を軸とし関連性を活かした実践の中で多く見られた子どもの姿は、自分の思いを自由に表現することの楽しさと自信である。そしてそれは自己肯定感と共に他己肯定感にもつながっていったことが、学級の集団をほぐし、友達理解に有効であったと思う。

●国語『ずうっと、ずっと大すきだよ』での一コマ

C1：先生、どうしてこの‘ずうっとずっと大すきだよ’のところ（題名を指している。）には、「」がついてないの。

全員：ほんとだ。なぜかなあ。（口々に声が上がる。）

C2：それは、心の中でずっと言っている言葉だから「」がついてないんだよ。

全員：そうかあ。なるほど、いいね。

加えて、人の真似ではない自分だけの発想を大事にする風潮は大きく、一人一人の伸びやかな発想を随所に見ることができた。それがまた、自己の思いを表出させる力が授業を活性化したり、自己理解・他己理解につながったりしたように思う。

(5) 1年生の学級集団づくり

授業とともに大切にしていることは、学級集団づくりである。もちろん双方相加相乗効果であるが、1年生の子どもにも自治ができるか、それが挑戦であった。教師の言いなりになって、教師の号令のもとに動く子どもたちにはなってほしくないのである。常に自分達で考えて行動し、楽しみも見つけてほしいのである。どん欲に自分の人生を生きる子どもたちの集団にしたいと思うのである。しかし、1年生は何も知らない。何も知らないところから始まるということは、大変なことである。それがデメリットであるが、逆にメリットでもあることに気づく。何も知らないのであるから、何が正しいのかどうやるべきなのか、ちゃんとした理解をすれば、すんなり入るといのがメリットである。

しかし、学校というところはへとすてきなところだろう。上の学年のすることや6年生の采配

を目の当たりにする機会をごまんとあるのである。よいお手本は常に身近にあった。そして、子どもたちは見事に学んでいった。素晴らしいことには、お手本からもそのお手本の失敗からも、自分達の実践やその有り余る失敗の中からも学んでいった。これはすごい力である。小さな1年生が、自分達の課題と改善点を見つけ学んでいるのである。こうして、学級は、自分達で運営するものである、自治をすべきであるということを当たり前にしていった。もちろん、本当の自治とは言えないまでも、そういう体制を学んでいくのだと分かった。

●係活動『くずりゅう』（文集）より

「アイデアいっぱい かかりかつどう」

1ねん2くみ H.K

わたしはぜんきたのしいことをやるかかりになりました。さいしょはなにをやるかいいのかわからなかったの、しごとができませんでした。そしたらせんせいが「クイズをやったら。」といったのでわたしはやってみることにしました。

そしてわたしはクイズをやってみました。そしたらみんなのしようにクイズをやってくれたので、とってもうれしくなりました。さいしょはじぶんでかんがえていたけど、うまくできるようになってきたので、クイズの本にしました。むずかしくてこたえられない子もいたのでグループにしました。みんなクイズがこたえられるようになったのでうれしかったです。でもみんなクイズばかりだとひまだとおもったので、みんなのいけんをきくことにしました。

みんなクイズがこたえられるようになったのでうれしかったです。でもみんなクイズばかりだとひまだとおもったので、みんなのいけんをきくことにしました。そしてみんなにきいたら、ボーリングといたのでボーリングにしました。でも、どうぐがないし、ものをもってきたらだめだからしばらくかんがえてみました。そしたら、いいことをおもいつきました

それはペットボトルとボールでやるボーリングです。どうやってやるかという、まずペットボトルをならべて、ボールでたおすボーリングです。

そしてみんなでボーリングをやってみました。うまくできるかどうかさいしょはとってもどきどきしていました。でもがんばってやってみたら、みんながたのしそうにやってくれました。とてもうれしくなりました。

それから、あいいむいてほいやじゃんけんをかんがえてみんなをよろこばせました。これからいろいろなアイデアをかんがえたいです。

という存在がいかに今の時期の子どもたちにとっては、大きなものであるかを私が理解していなかったためであると思われる。そんな中でも子どもたちは深く資料をきっかけにして考えることができていて、その力を尊敬した一授業であった。

T : お母さんはたった一本の花しかなかったのによこんでくれるかな。

C : (多数) うん。

C 1 : 一本でもうれしいよ。

C 2 : すてきなプレゼントありがとう。

(児童感想より)

…その子のおかあさんがびょうきで一本のこしていったの。モイラちゃんのおかあさん、げんきになるといいな。あとで、おみまいにいけないからおおきなこえで、おかあさんげんきになるといいねって言うてくる。

子どもたちの道徳性の枠は様々である。特に1年生は、生活経験の差によって、大きな差異があることも事実である。実際に建前を知らない子どもたちは正直で、今現在の自分の中にある道徳的価値が絶対である。なかなかその枠を広げたり変えたりするのは難しい。学年が進むと、本音と建て前を使い分け、口ではそう言うておくというような場面に出くわすこともある。しかし、1年生はたとえ大きな起爆剤となるようなきっかけや教材があったとしても、当事者以外はそれほどその場面を理解しないものである。とっさにはできないのである。変わる瞬間があれば、あっけなく変わることもある。なかなか授業でそれを掘り起こし、枠を広げていくことにつなげることは難しかった。有り体に言えば、それぞれの心にすんと落ちるような授業はなかなかできなかったのである。道徳はいかに難しいかを再び実感した。授業で足りない部分は、少しの変容や学びでも大きな成長ととらえて、ふだんから肯定的に認めていくことが大切であると思った。そして、それよりもこうして自分達がよりよく生きるためにしっかりと考えていくことが大切なのだということを身につけさせていくことに価値があると思った。先生が価値判断の基準を決めるのではなく、自分

(6)心を育てる

何年生であれ、最も重要なのが、道徳心の育成である。自治の根幹に道徳心がなければ、暴政になってしまう。生活の中で道徳教育を大事にするように意識していかないと子どもたちはどう進めばよいかのものさしがつくれない。道徳の授業はもちろん、あらゆる場面で道徳性を高める指導をしてきた。「こんなときはどうするか。」話し合い、考える。それでいい。正しく生きること、しなやかに優しく生きること。この1年生のうちから、大事にすべきだと思った。

●道徳『ぼくのはな さいたけど』より

誰に対しても、深い思いやりの気持ちをもつことをここでは最大の道徳的価値としている。しかしながら、子どもたちはそこまでの価値観をもつにはいたらなかった。お母さん

がまず、しっかりと考えていくべきなのだということが大事だと伝えていきたいと思った。

(7) 1年生との歩み

この1年間は、私にとっては1年生の子どもたちと同じように日々新鮮なことの連続だった。不安や驚き、感動にあふれた一年間であった。ある子が修了式の日、全校児童の前でスピーチをした。「毎日がドキドキでしたー」という一文にふれ、私は深く考えた。楽しい中にも初めてのことや不安を抱えての一年は、きっとその子にしてみれば、これまで生きてきた中では、どんなに大きな変化のあった一年だったのだろうと思う。そして、自分に降りかかるいろいろな課題を小さな体で幼いながらも克服し解決しつつ、歩んだ一年だったのであろう。

「来年も先生がいい。」お世辞にもそう言ってくれる子どもたちに、私は心の中で手を合わせていた。

6. 学び続ける教師の根幹をなすもの

（小林 真由美）

冒頭に記したように、彼女ほどのベテランになれば、授業も学級経営もこれまで培った腕で、難なく乗り切ることができる。何も努力しなくても教員としての務めは十分果たしていけるのである。しかし、彼女は挑戦し続ける。学び続ける。進んで授業を公開し、その授業もやったこともない中身に常に挑戦し、すばらしい授業だったにもかかわらず、うまくいかなかったと悔しがってまた新たなことを改革する。今年度はずいぶん、長年の夢であった「せんせの教室」なる講座を開講し、隔週の金曜日の夜、若い教員向けに研修を行っている。この内容についてはまた別の機会に紹介したいが、「心に残る授業の再考察」「卒業文化の創造」「道徳は大事」「学びを実感できる授業づくり」など魅力的な内容で、毎回、30分程度のプレゼンと互いのセッションで1時間行う。大学院生、講師、新採用教員だけでなく、ベテランの先生方も参加し、参加者は毎回、増え続けている。研修に参加するたび、私は彼女から、教師としての技というより、教師としての熱意を学ぶ。忙し

い中でプレゼンを用意し、1時間の内容を考え、たくさんのお菓子まで用意して招いてくれる。終わった後には、会報を作成し、それを参加者に配信する。この熱意はなんだろう。それは紛れもなく、彼女の日々の子どもたちへの熱意と同じものである。私なりに彼女の実践を追いながら、その根幹を次の3点に挙げる。

(1) 子どもの真の成長を願うこと

彼女の授業をその時間だけでなく長い単元構成として構想していることは、6年生の壮大な授業づくりでも、1年生の5月から3月につづく授業でもよくわかる。彼女は1時間だけで、その成果を図ろうとはしていない。単に成績を上げるとか、漢字を書けるようにするとか、計算を身につけるとかではなく、彼女のねらいは子どもの真の成長にある。「この子が将来を生き抜くために、こんな力をつけてやりたい」という願いによれば、自然と1時間だけの狭い視野にとらわれず、ダイナミックな単元を構想する。つけたい力は人間としての生きる力であり、それは簡単に1時間でつくものではないからである。彼女の授業、学級経営、生徒指導すべてがその大きな願いに基づいている。だからこそたった1時間の授業であっても、精一杯を尽くしてトライする。なぜならそれは子どもの一生を支える貴重な1時間だからなのである。彼女にとって人生を左右するという責任は大きく、そしてまた何ともいえないやりがいのある仕事なのだろう。それが彼女の学びの目標となっている。

(2) 子どもとともにつくること

その貴重な1時間に向けて熱心に準備を重ね、一生懸命に教材研究する。しかし、彼女はとても柔軟でフレキシブルである。6年生に向けてよく「今日の授業はノープランです」と宣言した。1年生の授業でも子どもが食いついてこなければ、核となる部分もあっさり切り捨てる。決して自分の努力に執着しない。それは、子どもと一緒に授業を作っていくからであろう。事前に話を聞くといつも「でもどうなるかわかんない。出たとこ勝負だね」と言う。決して投げやりな子ども任せで

はない。入念に準備しながらも、そのときの子どもにとって最も大事なものに添っていかうとする。そしてそれが楽しくてたまらないのであろう。子どもたちが彼女の授業に夢中になるように、彼女もまた子どもたちと共に授業を作ることに夢中になっている。それが彼女の学びの喜びに繋がっている。

(3) 探究心をもつこと

しかし、結局のところ、彼女は学び続けることが好きなのである。携帯電話をスマートフォンに変えたのも真っ先に彼女だった。歌舞伎を見に行くと言って、着付けを習い、東京まで着物を着て出かけていく。彼女の家の中は彼女の手作りのかわいい置物で一杯である。彼女は「挑む人」なのだ。「もともとの性格」と言ってしまうとそれまでだが、私はこれからの教師に必要な大事な資質であると思う。これまでは、教師も公務員として安定を望み、平凡に生きる一面があった。しかし、この「挑む心」はこれから生きる子どもたちに、不可欠なものである。それが「探究」に繋がり「新たな学び」に繋がっていく。子どもたちにつけたい力は、教師もまた持っていなければならない。探究心のない教師に探究心のある子どもは育てられない。これが彼女の学びの原動力となっている。彼女自身が常に「学びたい」と思っていてそのアンテナを張り巡らせている。そしてそこから得られた自分の問いを、子どもたちに振りかけて、共に考え合う授業づくりを仕掛けているのである。

7. 学び続ける教師であるために

(渡邊 淳子)

いつまでも学び続けたいと願う。教師である限り。昨日よりは今日、今日よりは明日、いい先生になりたい欲望をおさえられない。ちっともかっこよくなくなかなくてもいい。教師も子どもとともに成長し、日々学びを更新していきたいのである。

そのために必要なことは何か。抽象的な言葉でしかまとめられないが、これまでの実践から思うことを、以下に述べてみたい。

(1) 「チャレンジ」し続ける教師

教師は常に何かにチャレンジすることで子どもたちの先に行くものとして、がんばって生きている姿を子どもに見せていかななくてはならない。失敗しても様々な課題と格闘し、取り組んでいる姿を見せなければならぬと思っている。常に熱く感動と深い学びを呼ぶ授業をつくろうと努力すること、常にチャレンジ精神で、新しい授業をつくっていくことが生きるを身をもって教えることでもあるかもしれない。

(2) 「問い続ける姿勢」を忘れない教師

教師は常に問いを発する生きものである。子どもに対しても、自分に対しても問うべきである。本当にこれでいいのか、他に方法はないのか、よりいいのはどれか、正しいのはどちらか、ともに考え、答えを見つけ、学ぶことの楽しさを味わう、そんな教師でありたい。これは授業の本質と大きくかわる。そして、あえて難しい方を選ぶ、簡単に答えを求めない、そんな中で子どもたちは次々と学び獲得していくものだからである。最終的には何のために学ぶのかの答えを自分自身のよりより生き方につなげるために学ぶということを知るために、授業だけではなく生き様にも問いを発し続けなければならないと思う。

(3) 「妥協しない」教師

つまりは、自分に負けないことを誓いたい。確かに時間は無限ではないし、全てに妥協しないことは不可能である。しかし、安易に妥協する教師にはなりたくない。自分の都合で自分が楽だからといって、投げ出すような教師に子どもたちは習いたくないはずである。負けず嫌いの自分が好きである。

(4) 「熱く語る」教師

同時にいつも「熱く語れる教師」であることを願う。子どもとともに考え、子どもの生き方や自分の生き方への思いを語る。それができる教師でありたいとも。時にはぶざまに泣いても、

ののしられても、教師として、子どもたちに語ってやりたい。この一年は一年生にも語ってきた。子どもは常に真剣に自分に対峙してくれる先生を待っている。たとえ生きている年数は大きく違っても、しっかりと語ってあげたいと思う。出会った責任としてー。

(5)「愛し続ける」教師

最後は、陳腐で言い古された言葉でしかない。「愛し続ける教師」である。目の前の子どもを愛し、幸せを願い続ける、そんなことくらいしかできない。そういう自分の歩む教師道を愛し続ける。生涯そんな教師であり続けたい。

8. 教師であること

彼女のここまでを追い続けると、最後はこの上記の5つに行き着く。彼女の言葉を借りれば、言い古された5つの教師の基本姿勢といえよう。しかし、この5つを大事にして学び続ける教師が今、どれほどいるだろうか。「ゆとり」「脱ゆとり」「基礎基本」「アクティブラーニング」・・・新しい学習指導要領が近々出されるということで、教育は日々、変わり続ける。しかし「不易と流行」と言われるごとく、変わってはならないこともある。彼女が大事にしてきた5つの姿勢は、教師として変わらずに持ち続けるべき不易の部分である。チャレンジし続け、学び続け、常に向上しようとしてきた彼女の礎は、皮肉にも明治の学制以来、あらゆる教師が大切にしてきた変わらぬ姿勢であった。この先どんなに教育のあり方が変わろうとも、日本の教育が決して見失ってはいけないもの、それが教師の本質なのである。